

平成27年度 校内現職教育について

1 昨年度の研究成果と課題

昨年度のテーマ「地域に根ざした創意工夫あるE S D活動と道德教育の連携 ―道德的心情の高まりが生み出すE S D活動―」に基づいて、E S Dカレンダーを見直し、道德とE S Dの活動の連携を強化し、話し合いの活動を充実させる手段として、シンキングツールを取り入れ、各学年に応じた道德やE S Dの授業作りに取り組んだ。

(1) 道德的心情の高まりについて

- ・ E S Dカレンダーを見直し、道德の授業の連携強化を図ったことで、計画的にE S Dの実践と道德の授業が関連するようになった。
- ・ 道德に関する3人の講師の先生による影響は大きく、職員全員の共通理解が図られて、各学年の実践に直接に結びついた。

(2) 道德の授業とE S Dの連携を図った実践

5年生の実践では、総合的な学習の時間では行動面、道德では情緒面と取組を行ってきたが、共に関連づけ合いながら取組を進めることができた。総合の取組の中で、「人の思いに重点を置いて調べていきたい」とする考えもその成果である。

また、このような他領域にまたがる授業の実践を通して、授業をすべて単発的に考えるのではなく、つながっているものであるという意識を児童にもたせることができた。児童の中には、社会科で米作りに関する単元を行った時にも、「総合でやっている農業と関係してくるね」といったような視点をもつ者もいた。これは、E S Dカレンダーの中に包括されている教材のつながりにあたり、それを児童に気づかせることができた。

さらに、話し合いにおいてシンキングツールを用いたことにより、視覚的に見やすく仕分けするという役割だけでなく、新しく課題を見つけるという別の役割において、シンキングツールの価値を見いだすことができた。話し合いの結果が明確に見えることから、児童も課題を「人の思い」と位置づけ、主体的に活動することができたと考えられる。

(3) 自己肯定感を高める学級活動の取組

4年生ではソーシャルスキルトレーニング、5年生ではハッピートークトレーニング、6年生では、アサーショントレーニングなど計画的に実施していることで、互いに仲間同士うまくやっていこうという意識が高まっている。

(4) E S Dの学校評価のためのアンケート結果

今回の調査では、前回同様ふるさと甚目寺をすばらしい町、よい町だと思い、大切にしていきたいと思っている子どもが多い一方、何か考えたり、行動したりしたいと思う子どもが比較的少ないという実態は変わらなかった。ただ、この調査を実施して3年目となるが、年々どの項目も評価が上がってきているのは、研究の成果と言える。また、何か考えたり、行動したりしたいと思う子どもの割合についても、思うと答えた児童の割合が前年比8%増と有意性を伺える数字となった。道德との連携は本年度始まったばかりなので、今後も実践の積み上げを継続的に行っていきたい。

(5) 本年度へ向けての課題

道德とE S Dの活動を連携していくために有効な手立てとしては、道德の自作教材開発が挙げられる。ただし、道德の自作教材は、作るのに大変時間がかかるため、今後も学年ごとに年に一つか二つずつ増やしていきたい。また、その資料を誰もが使えるように、共有フォルダーに蓄積していきたい。

話し合いから課題を見つけたり、課題を解決したりするための仕分け作業については、課題に応じて様々なシンキングツールがある。これらを児童が自ら見つけ出して使っていけるように引き続き習熟させていきたい。また、仕分けした後の話し合いについては、解決に向けて適切な話し合いができ、高め合っていけるようさらなる研究を続けていきたい。

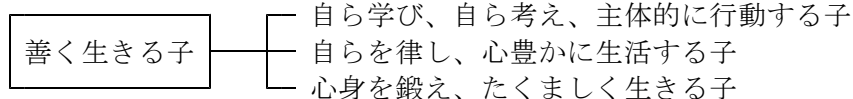
人間関係作りについての学習も4年生からではなく、1年生から計画的に取り組んでいけるようにしていきたい。

E S Dの取組は、年を経るごとに変化していく。良いものは残し、切るものは切って、実現可能なように進化発展をめざし取り組んでいきたい。

2 本年度の研究の概要

(1) 教育目標

「善く生きる子」の育成を目標とし、知・徳・体の調和のとれた教育により、豊かな人間性とたくましい体をはぐくみ、心身ともに健やかな児童の育成を図る。



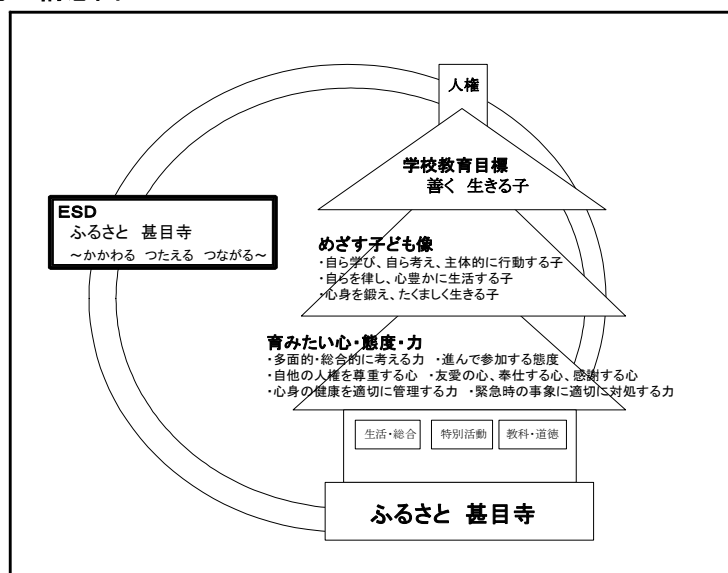
(2) ESDの活動テーマ

ふるさと 甚目寺 ー かかわる つたえる つながる ー

(3) 育みたい心・態度・力

- ・ 多面的・総合的に考える力
- ・ 進んで参加する態度
- ・ 自他の人権を尊重する心
- ・ 友愛の心、奉仕する心、感謝する心
- ・ 心身の健康を適切に管理する力
- ・ 緊急時の事象に適切に対処する力

(4) 学校教育活動の構想図



(5) 本年度の取組方針

ア 話し合いの傾聴→仕分け→高め合いの高め合いに焦点を当てた研究

- ・ 道徳や総合学習での「高め合い」を目指した研究授業の実践（各学年1実践）
- ・ 学校訪問の指定授業で、高め合いの授業を提案する。（各学年1実践に含める）
- ・ 各学期バランスよく実践を行い、1月までに全ての実践を終える。

イ シンキングツールの活用

- ・ 「高め合い」にはシンキングツールが有効である。積極的な活用を図る。
- ・ 授業参観でESDと絡めた道徳やシンキングツールを取り入れた道徳を見せる。
- ・ 学校訪問では、シンキングツールを取り入れた授業に積極的に取り組む。
- ・ 教室には頻繁にシンキングツール活用例を掲示する。
- ・ シンキングツールをいつも活用できるよう、よく使うシンキングツールを印刷しておく。

ウ 思いやりや郷土愛を中心に据えた道徳的心情の高まりの育成

- ・ ESDカレンダーの見直し。
- ・ 授業参観や学校訪問等で実践した道徳資料の蓄積。

エ 道徳の授業と並行して、道徳的実践の場としてのESD活動実践の展開

(ア) 各学年のESD活動テーマ

- | | |
|---------------------|------------------|
| 1年：学校周辺や幼稚園・保育園との交流 | 2年：地域の商店街や施設との交流 |
| 3年：地域の福祉 | 4年：地域の自然環境 |
| 5年：地域の産業 | 6年：地域の文化遺産 |

(イ) 道徳の授業と並行してのE S D活動実践の展開

- ・ 地域の人々の人材活用による地域を知る活動
- ・ 地域で学んだことを発信する活動
- ・ 地域に貢献するための具体的な行動

オ 自己肯定感を高める学級活動の取組

- ・ 高学年を中心とした取組として、4年ではソーシャルスキルトレーニング、5年では、ハッピートークトレーニング、6年ではアサーショントレーニングを行う。
- ・ 各学年のE S Dカレンダーに自己肯定感を高める学級活動等の取組を入れる。

カ 理数教育の充実

初任者、少経験者（3年以下）を対象とした算数の授業研究を鈴木公司先生を講師に招いて行い、少人数指導も継続する。

（6）本年度の校内研究の研究主題

思いや考えを交流し、互いに高め合う児童の育成

－総合学習と道徳の連携を通して道徳的实践力を高める－

本校は人権教育を継続して取り組んでおり、最近ではそれに加え平成22年度からE S Dに取り組み、平成24年12月にユネスコスクールに登録を果たしている。E S Dの柱はこれまでの流れを受け継ぎ、人権教育である。また本校の道徳教育も、人権教育を中心に展開してきており、今はE S Dと一体となって進めている。つまり本校の教育活動は、人権教育を柱とした道徳と生活科や総合的な学習の時間を中心に、他の教科、特別活動等と連携を図りながら、各学年の生活科・総合的な学習の時間年間指導計画やE S Dカレンダーに則って進められている。

昨年度の研究は、「地域に根ざした創意工夫あるE S D活動と道徳教育の連携 一道徳的心情の高まりが生み出すE S D活動」というテーマで、E S Dカレンダーを見直し、道徳とE S Dの活動の連携を強化した。それにより、情意面を道徳が、行動面を総合学習が担う形で、車の両輪として学習が進むことを期待した。そして、昨年1年間連携させた授業づくりを各学年少しずつ準備して行っていた。そうした結果、昨年度1月に実施した総合学習の児童向けアンケート調査では、今まで低かった項目である、「甚目寺の現在や未来のために何か考えたり、行動したいと思いますか」について、「思う」と答えた児童の割合が全校で8%改善して、42.8%となった。この8%に有意性があるかどうかは定かではないが、改善傾向にあるのは確かであろう。したがって、昨年度の取組を引き続き本年度も踏襲して、学習活動をさらに充実させていきたい。

さらに本年度は、昨年度の5年生の実践で効果が見られたシンキングツールの新しい活用の仕方を積極的に進めていきたい。昨年度の5年生は、話し合いにおいてシンキングツールを用いたことにより、視覚的に見やすく分類するという役割だけでなく、その分類した結果をみて新しい課題を見つけることができ、次の活動につながった。この成果を今年は全校に広めていきたい。つまり、話し合いによって、思いや考えを交流した結果、新たな認識に立って、次の活動へと向かう流れを作っていきたい。そうすることで次への活動が必然的、主体的となり、一貫したE S Dの取組が行われていくはずである。

※ 互いに高め合うということについて

思いや考えを交流したことで、個々の価値や認識の再構築が図られた状態をいう。

つまり、以前の思いや考えに変化があった。変化がなくても確信をもつことができた状態である。その評価の仕方については、シンキングツールや授業後の感想などで判断する。
したがって、授業の最後で再構築がされたかどうかを確認する場面を作る必要がある

（7）研究組織

